



# サンタの伝言



おバカな刑事

春日信彦

## ブラックハウス

クリスマスを間近に、世界中の子供たちはサンタからの贈り物を夢見て心を弾ませていたが、世界を動かすホワイトハウスに歴史に残る不可解な事件が勃発した。それは、5000羽以上のカラスが、ホワイトハウスに集合し、さらに刻一刻とどこからともなく現れたカラスたちが、ヒラ〜り、ヒラ〜りと舞い降りるといふ珍事だった。当初は、疲れたワタリガラスが休憩にやってきたとユーモアを交えたニュースとして話題になっていたが、カラスの大群で屋根が真っ黒に塗り替えられたころから、世間では、カラスを使った何者かによるテロではないかとうわさが広まった。

もはや、ホワイトハウス館内に入ることはもちろん、周辺に近寄ることもできないほど、カラスの群れは増大し、FBIも乗り出すほどになっていた。政府は、ワタリガラスの一時的な行動だと判断していたが、一般市民は増え続けるカラスに恐怖を抱き始めた。カラスが100羽ほどになったころ、DC警察は爆竹の爆音で追い払おうと試みたが、カラスは、その程度の音ではまったく驚かず、それどころか、アホ〜、アホ〜と大声を張り上げ、ホワイトハウスに近寄ってくる警官に襲いかかるようになった。

これらのカラスの異常行動は、世界中に広まり、小さな子供たちにまで知れ渡る話題となったが、もはや、ホワイトハウスを真っ黒に覆い尽くすカラスの大群は、国家の一大事となっていた。ホワイトハウスに群がる原因が解明できず、また、カラスを除去する方法が見当たらなかったからだ。一時は、射殺する方法も考えられたが、国際鳥獣保護団体からの猛烈な非難を懸念し、政府は、やむなく穏便に除去する方法を模索し続けた。だが、結局、妥当な方法を見出せなかった。

ついに、政府はさじを投げ、世界各国にカラス除去の依頼を発信した。その内容は、速やかにカラスを除去したものには、100万ドルの報奨金を支払うと言うものだった。日本円にして、約1億2千万円と言う大金だった。その大金を目当てに多くの鳥類学者は、われこそはと名乗りも上げて、カラスが嫌う超音波、音、光、匂い、で除去しようと試みたが、そのような既存の方法では、大群のカラスたちはびくともしなかった。

集団的自衛権をもとにアメリカ政府は、日本にカラスの除去支援を求めた。日本政府は、自衛隊をホワイトハウスに派遣し、米軍と協力してカラスの捕獲に乗り出したが、賢いカラスは、軍隊がやってくるとヒラ〜リ、ヒラーリと舞い上がり、オバカ〜、オバカ〜と軍隊をあざ笑い、捕獲作戦は大失敗に終わった。このままだとカラスにアメリカが乗っ取られると恐れた政府は、カラスを食肉とする立法に乗り出した。だが、この法案は、最終手段であって、あくまでも、穏便にカラスを立ち退かせることを最優先した。

軍隊によるカラス捕獲の失敗により民主党の支持率は急降下した。民主党が、次期大統領選を勝ち抜くためには是が非でもカラスの除去に成功しなければならなかった。日本政府においても、カラステロが国会議事堂で起こされるのではないかと警戒し、沢富警察庁長官を議長にテロ対策委員会を立ち上げた。また、全国の警察署にテロ対策プロジェクトを設置させた。

福岡県警テロ対策プロジェクトメンバーに指名された伊達刑事と沢富刑事は、いつもの春吉橋近くの屋台でぼやき漫才をやっていた。「寒いときの熱爛は、最高だな～。でもな～、俺たちは、どうして、こんなについてないんだ。テロ対策に追いやられるとは。お前と組まされて、俺の出世が遠のいていくような気がする。貧乏神に取り付かれたというのか・・・」沢富刑事は、いつものぼやきが始まったと思い、うつむいてお湯割のグラスに口をつけた。

伊達刑事は、いつものぼやきをつぶやいてしまったとほんの少し反省したのか、ポンと手をたたいてカラスの話題を持ち出した。「そう、ホワイトハウスのカラス、今では、世界的スターじゃないか。テロにカラスを使うとは、恐れ入った」沢富刑事もカラスの異常行動がまったく分からなかった。もし、テロだとすれば、何者かが電磁波を使ってカラスを呼び寄せているのではないかと思った。沢富刑事は、コンニャクを一口かじって、口をモグモグさせながら返事した。

「まったく、不思議なカラスです。いったい、どうして、ホワイトハウスに群がったのですかね。いたずらにしては、大事件ですよ」テロと思っている伊達刑事は、グイッと熱爛の日本酒をのどに流し込み、叫んだ。「おい、あれを単なるいたずらと言うのか。あれは、間違いなくテロだ。きっと、民主党攻撃のテロに決まってる。戦争大好きの共和党の仕業だと俺はにらんでいる」

いつもの妄想が始まったと沢富刑事は思い、つぶやいた。「先輩、テロと決めつけるのは、勇み足になりませんか。アメリカも日本も何か事件が起きるとテロだ、テロだ、と騒ぎますけど、偶然の出来事だってこともありますよ。あれだって、カラスの気まぐれかもしれませんよ。カラスのちょっとしたいたずらと考えてもいいんじゃないですか。ホワイトハウスがカラスのフンで臭くなったら、笑えるじゃないですか」

あまりにも能天気な沢富刑事の話にゆで卵の黄身がのどにつかえ、ゴホ～、ゴホ～と大きなせきをした。「先輩、大丈夫ですか。ちょっと、冷えますからね」伊達刑事は、口に含んだお酒を喉にグイッと流し込み、卵の黄身を胃の中に流し込んだ。窒息死するかと冷や汗をかいた伊達刑事は、大きく深呼吸してあきれた顔で話しはじめた。「おい、お前は、どうしてそんなに気楽なんだ。今、アメリカは、テロ攻撃を食らってるんだぞ」

沢富刑事は、タイショー、と声をかけてとグラスを差し出し、無然とした顔で答えた。「あれがテロって言う証拠でもあるんですか？どんな方法でカラスを呼び寄せているって言うんですか？何かあるとテロって言いますが、ほとんどの場合、確かな証拠はないんですよ。マスコミは、事件を大きくして、金儲けしているだけじゃないですか。あんなのは、マスコミが仕組んだいたずらですよ。でも、カラスを呼び寄せる方法を知っている者がいるってことですよね」

伊達刑事は、グラスを置くと大きくなずいた。「そこなんだ。カラスは、気まぐれでホワイトハウスに群がっているんじゃない。誰かが、何らかの方法でカラスを呼び寄せているに違いない。いったいどうやって、呼び寄せているんだ。いたずらだとしても、カラスを呼び寄せるなんて、天才じゃないか？カラスと会話できるやつでもいるのか？」沢富刑事は、とぼけた顔でチクワを一口かじり、ムシャムシャと口を動かし、お湯割を一口含んだ。

ほんの少し顔をしかめた沢富刑事は、伊達刑事の横顔に向かって返事した。「ちょっと思いついたことなんですが、カラスは電磁波に反応して集まっているんじゃないでしょうか？誰かが、遠隔操作で電磁波をホワイトハウスから発信しているんじゃないかと思うんです」伊達刑事は、さすが秀才は考えることが違う、と言う顔でうなずいた。ムウ～～～、と大きな唸り声を上げ、質問した。

「おい、それは、本当か？カラスは、電磁波で誘導できるのか？どんな電磁波だ？」ちょっと困った顔をした沢富刑事は答えた。「いや、渡り鳥をヒントに、ちょっと思いついた方法です。鳥類学者じゃないので、カラスと電磁波の関係はまったく分かりませんよ」伊達刑事の頭の中に大金持ちになった自分が現れた。「なにになに、そう言うことか。もし、電磁波でカラスを誘導できるならば、カラスを除去できるということだ。つまり、俺たちは、億万長者になれるってことじゃないか」

とうとう妄想が爆発したと思った沢富刑事は、ドン引きの顔で返事した。「先輩、電磁波でカラスを誘導できる方法を知っている学者がいたら、とっくにその方法でカラスを除去していますよ。今のところ、鳥類学者でも分からないはずですよ。もしかしたら、カラステロの首謀者は、鳥類学者じゃないかもしれませんね。カラスを呼び寄せる機械を発明した奇人のいたずらか、カラスと話ができる子供のいたずらじゃないですかね〜」

伊達刑事は、いまだ、世界中の誰もが報奨金をゲットできていないと言うことは、大人ではできないということだと思った。もし、カラスを除去できるとすれば、カラスと会話できる子供もしかいないと確信した。なんとなく、カラスと会話できる子供が日本にもいるような気がしてきた。無数の札束が天からヒラヒラと目の前に舞い落ちる幻想が現れると、興奮した口調で話しはじめた。「おい、もしかしたら、日本にも、カラスと会話できる子供がいるかもしれないぞ」伊達刑事は、刑事としてまじめであったが、お金に関する妄想が起きると歯止めが利かなかった。

沢富刑事は、ちょっとからかうことにした。「なるほど、日本にもいるに決まっています。どこかで、聞いたことがあるんですよ、動物と話ができる人がいるって」ギンギラギンに目を輝かせた伊達刑事は、顔を真っ赤にして話しはじめた。「いる、いる、日本にもきつといる。そいつを探し出せば、億万長者だぞ、ワクワクしてきたな〜。でも、どうやって探すんだ？」まったく探し出す手がかりがないことに気づき、伊達刑事は、自分の妄想に愕然とした。「探し出す手がかりがまったくないんじゃ、お手上げだな。酒の勢いで、ちょっとした夢を見たということだな」

がっかりした伊達刑事を気遣って沢富刑事は、夢を膨らませることにした。「先輩、いつもの先輩らしくないですよ。粘りが第一だ。きっと、手がかりはある。足が棒になるまで歩け。そう、いつも言ってるじゃないですか。とにかく、探しましょう。まずは、聞き込みからです」伊達刑事は、ほんの少し笑顔を作り、しぼみかけた妄想が再び膨らみ始めた。「そうだよな、探してみないと。偶然、そんなやつに出くわすと言うこともあるしな。でも、いったいどんな聞き込みをやるんだ」

一瞬、しかめっ面をした沢富刑事だったが、笑顔を作り、軽やかな声で話しはじめた。「難しく考えなくていいですよ。カラステロの話題から、カラスが好きな人を知っていないか、聞き出すんですよ。きっと、カラスが好きな人は、カラスと会話できると思うんです。とにかく、カラスが好きな人を探しましょう」伊達刑事は、膳は急げ、と思い、手当たりしだい、カラステロの話題で聞き込みをすることにした。

「そうだ、早速、ウチのに聞いてみるか。オヤジ、御あいそう」伊達刑事は、自宅に帰り細君にカラステロの話をすることにした。「俺んちで、話の続きだ。福岡代表のカラオケ女王、呼べないか？」沢富刑事は、ひろ子に電話した。「グッドタイミングでした。10分もすれば、来てくれるそうです」二人が、春吉橋の袂で震えていると、中州の歓楽街ではちょっと有名なピンクのYESタクシーが二人の前で止まった。



後部ドアが開くと沢富刑事を先に押し込み小太りの伊達刑事が、笑顔で乗り込んだ。「自宅まで」運転手は、笑顔で返事した。「はい、今日もご機嫌ですね。何かいいことでもありましたか」運転手は、ルームミラーに映った伊達刑事の間抜けな顔をチラッと覗き見た。ほろ酔い気分の伊達刑事は、妄想の話始めた。「ひろ子さん、俺たち、億万長者になるかも。カラス様様だ」

運転手は、なにを言っているのかまったく理解できず、適当に話をあわせることにした。「え、億万長者ですか？よく当たるという天神の宝くじでも買われたのですか？」沢富刑事は、いい加減なことをしゃべった伊達刑事に代わって返事した。「さっきのは、冗談です。ご存知でしょ、カラステロの報奨金の話。それですよ。伊達さんは、カラスと会話できる子供を探し出して、分け前をもらおうって魂胆なんです。まあ、ちょっとした妄想です。聞き流してください」

ねむり眼だった伊達刑事の目が、きりっとつり上がり、背筋を伸ばし話しはじめた。「ひろ子さん、単なる妄想じゃありません。日本のどこかに、必ずいるはずですよ。カラスと会話できる子供が。必ず、探し出して見せます、期待して、待っていてください」運転手もカラステロの報奨金のことは、知っていた。また、いまだ、カラスを除去できる人物が現れていないことも知っていた。

「さすが、伊達さんだわ。私も協力しますわ。お客さんにカラスが好きな人がいるか、それとなく聞いてみます。意外と身近なところにいるかも。カラスと会話できる子供を見つけることができたら、億万長者ですね、ワクワクするわ」沢富刑事は、ひろ子が、こんなにもお調子者だとは思わなかった。「ひろ子さんまで、浮かれないでください。単なる妄想です。カラスと会話できる子供なんているかどうか、雲をつかむような話じゃないですか。先輩、妄想はこの辺にしましょう」

運転手は、ルームミラーを見つめてニコツと笑顔を作った。「あら、沢ちゃんって、夢がないのね。動物とお話できる子供がいるって、聞いたことあるでしょ。きっと、いるわよ。探してみなけりゃ、分からないわよ。思うんだけど、きっと、あれって、いたずらね。カラスを呼び寄せられる機械を発明した天才のいたずらじゃないかしら。でも、大統領が困り果てて泣いていると言えば、カラスも分かってくれると思うのよね。とにかく、カラスと会話できる子供を探しましょう。どこかにいるはずよ」

伊達刑事は、身を乗り出して話し始めた。「そうさ。ひろ子さんの言うとおりに。とにかく探してみよう。もしいたら、ウヒウヒじゃないか、な～、沢富」伊達刑事の頭の中は、札束でいっぱいになっていた。妄想もここまできると調子を合わせる以外、収集がつかなくなってしまった。「まあ～、いいでしょう。宝くじの夢も、報奨金の夢も、似たようなものですからね。探してみますか」やけくそになった沢富刑事は、マジにガッツポーズを作った。

運転手がブレーキを踏むとタクシーは大濠公園の東側にあるマンション前に到着した。二人が車から降りると、ひろ子はウィンクをしてドアを閉めた。「カラスの聞き込み、任せてください」二人が手を振ると、ハイブリッドのピンクのタクシーは静かに消えていった。マンションのドアを開いた伊達刑事は、うれしそうな声でナオ子にビールを準備させた。「ナオ子～～～、ビ～～～ル」と夫の発音に上機嫌を感じ取ったナオ子は、何かいいことがあったに違いないと察知し、笑顔でフレッジにかけていった。

「あなた、おでん、あるわよ。熱燗いかが」おでんと聞いた伊達刑事は、笑顔で返事した。「それはいい、熱燗で前祝だ。ナオ子もいっぱいやれ。ナオ子、俺たち、億万長者になれるかも。さあ、こっちに来て、乾杯だ」ナオ子は、宝くじを百枚買ってきたのだと勘違いした。「宝くじ何枚買ってきてくださったの？100枚？」ナオ子は、おでんとビールをテーブルに置いて、熱燗の準備に取り掛かった。

伊達刑事は、ニコニコとするばかりで、ナオ子がやってくるまで何も言わなかった。「まだか、早くこっちに來い。サプライズだ、さあ」ナオ子は、二本のお銚子を載せたお盆を笑顔で運んできた。「熱いから、気をつけてね」伊達刑事は、まず、お酒をナオ子と沢富刑事の杯に、最後に自分の杯に注ぎ、乾杯の音頭をとった。「ついに、我が家にも春がやってきた。億万長者になれる日は、すぐそこだ。さあ、乾杯だ。カンパ～イ」三人は、笑顔で杯を響かせた。

ナオ子は、もしかしたら、100枚以上買って来たのではないかとワクワクしていた。「ね～、あなた、何枚買って来たのよ、もったいぶらないで、何枚よ？」伊達刑事は、笑顔で答えた。「宝くじは、一枚も買ってない。だが、今年は、確実に億万長者になれるぞ。喜べ」ナオ子は、ガクツと肩を落とし、いったい何のことやらわけが分からず、質問した。「あなた、宝くじ以外で、どうやって億万長者になるのよ。さ～早く、教えてちょうだい」

伊達刑事は、胸を張って、ゴホンと一度咳払いすると声たからかに話し始めた。「びっくりするな。俺たちはな、カラスと会話できる子供を探し出すんだ。きっと探し出せる。宝くじよりは、確率は高い。待っている、ナオ子」ナオ子は、いったい何のことやらさっぱり分からなかった。「いったいどういうこと。もっと分かりやすく話してよ。さっぱりわかんないわ」ナオ子は、苦虫をつぶした顔で、グイッと杯を空けた。

伊達刑事もキュッと杯を空けると小皿に大根と厚揚げをとった。「まあ、ゆっくり聞くがいい、カラステロの報奨金を知っているだろ。そこでだ、カラスを除去する名案を思いついた。カラスと話ができる子供を探し出して、その子供に除去をさせるってわけだ。巷では、カラスと会話できる子供が日本にいる、と言ううわさだ。そこで、俺たちが、いち早く探し出して、その子供を使って、カラスを除去しようってわけだ。そうすりゃ、報奨金が手に入るってわけだ。そう、ナオ子は、そんな子供、心当たり、ないか？」

あきれ返ったナオ子は、開いた口がふさがらなかった。こんにやくを顔にぶん投げてやろうかと思ったが、年末にケンカをしては縁起が悪いと思い、ちょっとだけバカにつきやってみることにした。「あなた、カラスと会話できる子供を探すより、宝くじを買ったほうが、億万長者になれるんじゃない。カラスと会話できる子供を探している間に、カラスは皆殺しにされるかもよ」

伊達刑事は、ナオ子の夢のない話にがっかりした。厚揚げにからしを塗りながら、夢を膨らませた。「ナオ子、どうして、そんなに悲観的なんだ。探してみなきゃ、わかんないだろ～。奇跡が起きて、カラスと話ができる子供が見つかるかもしれないじゃないか。俺は、日本のどこかにいると思うな。絶対、絶対あきらめないぞ。お前もだよな」伊達刑事は、沢富刑事に同意を求めた。

小さくうなずきながら聞いていた沢富刑事は、杯を置くと静かに話し始めた。「奥さんのおっしゃることは、ごもっともです。でも、もしもですよ、誰も、カラスを除去できなければ、カラスは、射殺されるでしょう。すでに、1万羽以上の数に上っているそうです。たとえ、国際鳥獣保護団体が反対しても、射殺されると思います。もはや、カラスを救えるのは、子供しかいないと思うんです。僕は、奇跡を信じます。きっと、カラスと話ができる子供がいると信じます。探し出してみたいのです」

ナオ子は、カラスがマシンガンで射殺される情景を思い浮かべると、大好きなガンモドキがのどを通らなくなった。うつむいてしまったナオ子は、沢富刑事の優しさに涙をこぼした。「そうよね、このままじゃ、皆殺しよね。とにかく、あのカラスたちを救ってあげなきゃ。私も探すわ、きっといるわよ。あなた」伊達刑事は、沢富刑事のやさしさを知り、自分の愚かさに悲しくなった。

「そうだよな、お金じゃないよな。カラスを救ってやらなきゃな。俺たちにできることは、やらなきゃ。話が湿っぽくなったな～。さあ、今夜は、飲み明かそう。明日からは、聞き込み開始だ」ナオ子は、涙を拭くとビールを空けた夫のグラスにお酒を注ぎ、グイ～～と一気に飲みほした。「よし、徹底的に、聞き込みね。やるわよ～。一刻の猶予もないのよ。分かっているの、お二人さん。カラスの命は、私たちにかかっているのよ」伊達刑事と沢富刑事は、見詰め合っただけでいた。

## 夢見る少女

アンナは、授業参観を終え、保健室の東側の並びにある児童相談室に向かった。亜紀の奇行についてイケメン先生に相談する予約を取っていた。中卒のアンナは、専門的な難しい言葉で話されたら、どうしようかとドギマギしていたが、イケメン先生と呼ばれている人工知能コンサルタントは、一般常識的な言葉で話すようにプログラムされていた。カツラコーポレーションが開発した人工知能コンサルタントは、母親に大好評で、相談を終えると彼のホッペにキスをして帰る母親もいた。

アンナが、恐る恐る相談室のドアを開くと、イケメン先生がオレンジの小さな丸テーブルに腰掛けていた。アンナが、先生の正面に腰掛け、挨拶した。「亜紀の母親です。よろしくお願いします」先生は、グリーン目をピッカ、ピッカと輝かせ、挨拶した。「ようこそいらっしゃいました。どんな、質問にもお答えします。遠慮されずに、ガンガン質問してください」アンナは、イケメン先生の甘い声を聞いて、緊張がほぐれた。

早速、アンナは、胸の奥でくすぶっていた悩みを打ち明けた。「先生、ますます、ひとり言が増えていくんです。このままで、大丈夫でしょうか？」先生は、マニュアルに従った返事をした。「日本国民は、憲法で表現の自由が認められています。まったく、問題はありません」アンナは、質問の趣旨が通じてないようで、もう一度、言い方を変えて質問した。「それはわかっています、子供が動物に向かって、なにやらしゃべっているんです。とにかく、気味が悪いんです」

先生は、心理学のプログラムを採用した。「人が動物と話をすることは、決して体や精神に害を与えるものではありません。これは、ストレス発散の方法で、むしろ、そのことによって、健全な心と体になるでしょう」アンナは、かわいい犬や猫と会話するのはなんとなく許せたが、気味の悪いカラスと話をするのは、納得がいかなかった。いったいなぜ、カラスと話をするのか知りたかった。

「先生、かわいい犬とネコと話をするのは、許せるんですが、気味の悪いカラスとも話しをするんです。どこか、心の病でもあるんでしょうか？」先生は、大人の先入観について指摘した。「お母様、カラスを気味が悪いとおっしゃいましたね。確かに、ゴミをあさったりして、人間に迷惑をかけることはあるでしょう。だからと言って、カラスは、悪い鳥だと決めつけてはいけません。亜紀さんは、カラスのやさしさや賢さを理解しているのです。だから、カラスと仲良くお話ができるのです」

アンナは、少しずつムカつき始めていた。先生は、母親の気持がまったくわかっていないと思った。犬、猫、カラスたちと楽しそうに話している姿を見れば、どんな親だって気味が悪いと思うと言いたかった。「先生、亜紀は、動物の言葉が分かるのでしょうか？人と話をするように会話しているんです。これって、病気じゃないですか？」先生は、特殊性について話をすることにした。

「動物と話をする人は、少ないでしょう。少ないからと言って、彼らを病人扱いしてはいけません。彼らは、動物の表情を言葉に変換する能力を持っているのです。だから、人間相手と同様に動物とも会話ができるのです。亜紀さんは、その能力が特に秀でていえます。決して、病気ではありません。お母様、ご心配ありません」アンナは、何か、先生に言いくるめられているようで、ますます、ムカついてきた。



「でも、先生、学校では、友達とうまくやっているのでしょうか？とても、心配なんです。友達から、変人扱いされていませんか？」先生は、学校での友達関係は良好であることを伝えた。「亜紀さんは、クラスの人気者です。イジメも受けていません。ただ、男子にモテすぎるので、女子に嫉妬されているようです。今のところ、三角関係のもつれから、イジメ自殺事件に発展することはないと思われます」

イジメを受けてないと聞いて安心したが、最近、反抗するようになったことについて聞いてみた。「最近、口ごたえをするようになったんです。素直さがないと言うか、意地っ張りと言うか、頑固と言うか、とにかく、最近、言うことを聞かないんです。親と会話せず、動物とばかり話をしています。母親に問題があるんでしょうか？それとも、亜紀に悩みでもできたのでしょうか？」

先生は、成長過程の心理について話し始めた。「それは、母親に問題があるのではありません。成長する上で必要な反抗です。これは、病気ではなく、健全な心の成長と考えてください。亜紀さんは、母親に言いにくいことを、動物に言っているのでしょう。亜紀さんは、動物に悩みを打ち明け、動物から癒しを与えられていると考えられます。おそらく、亜紀さんは、心の底に、人には言えない悲しみを抱えているようです。お母様は、亜紀さんを信じてあげることです」

アンナは、亜紀の動物との会話は、病気ではないと聞かされ一安心したが、拓実が生まれて、亜紀への態度が以前と変わってきたのではないかと不安になった。たとえ実の子供が生まれたとしても、亜紀への愛情は決して変わらないと思っていたが、自分では気づかず、亜紀へ冷たい態度をし始めているのではないかと心配になった。この不安を先生に打ち明けようかと思ったが、今回は、心の中に収めることにした。

「先生、少し安心いたしました。亜紀を信じて、育てていきます。今日は、ありがとうございました。失礼します」先生は、笑顔で話を締めくくった。「勇気を出してください。子供は、お母さんのやさしきで大きく育ちます」アンナは、先生に深々とお辞儀をして、相談室を出た。ほんの少し、心のもやもやが解消したアンナは、校門を出ると両腕を伸ばし、大きく背伸びした。そのとき、校門の左方向からを走ってきたピンクのタクシーが、ぐるりとユーターンして目の前に止まった。

女性の運転手は、アンナに笑顔を見せると、後部ドアを開いた。アンナは、タクシーを止めるつもりはなかったが、タクシーで帰る予定をしていたため、笑顔で乗り込んだ。「平原歴史公園まで、お願い」運転手は、はい、と言ってアクセルをゆっくり踏み込んだ。アンナは、チラッと見た女性ドライバーの顔が気になった。どこかで見たような顔だと思った。しかも、最近、テレビで見たような気がした。

カラオケ大会でトロフィーを手にした彼女の笑顔が脳裏にパッと浮かび上がった。アンナは、甲高い声でたずねた。「運転手さん、もしかして、カラオケ大会で優秀された方じゃないですか？」運転手は、ルームミラーに向かってちよっとうなずき、明るい声で返事した。「はい、カラオケ福岡県大会で優勝いたしました。憶えていただいていたなんて、うれしいです。来年1月に、全国大会に出場します」

アンナは、カラオケ女王に出会えて、有頂天になってしまった。「頑張ってください。日本一になれるといいですね」運転手は、元気よく返事した。「ありがとうございます。日本一目指して、頑張ります」アンナは、サインをしてもらおうかと思ったが、自宅についてお願いすることにした。「優勝されたときの歌は、石川さゆりさんの津軽海峡・冬景色、でしたよね、私も大好きなんです。全国大会では、なにを歌われるのですか？」

運転手は、笑顔で答えた。「森昌子さんの越冬つばめ、です」アンナは、越冬つばめも自分の好きな歌で、ますます、ファンになってしまった。「ぜひ、日本一になって、歌手デビューしてください」運転手は、こんなにも応援してくれる人がいるとは、意外だった。「お恥ずかしいんですが、若いころは、歌手になれると思っていたんです。でも、スカウトされなかったんです。やはり、ルックスですよ」

アンナは、彼女の歌唱力ならきっと歌手になれると思った。「それは違うと思うわ。演歌歌手は、顔じゃないわ、歌唱力よ。私だったら、スカウトするわ。芸能界って、見る目がないのね」運転手は、うれしくなったが、もうこの年では、歌手になれると思った。「ありがとうございます。もう、トシですから、趣味で楽しみたいと思っています」悲観的な運転手に、アンナは、気合を入れた。

「トシって、アイドル歌手じゃあるまいし、演歌歌手は、トシもルックスも関係ないでしょ、歌唱力とハートです。そんなに簡単にあきらめず、チャレンジしなさいよ。日本一になって、プロ歌手になってください。あなたなら、できます」運転手は、歌手になりたいと言う気持をとっくの昔に捨てていたが、顔を真っ赤にして応援してくれるファンの言葉を聞いていると、昔の情熱がよみがえった。

「本当に、ありがとうございます。とにかく、全国大会は、自分の力を出し切ります。ところで、話は変わりますが、カラステロのこと、ご存知ですか？」アンナは、突然の話題転換に面食らったが、世界中の誰しも知っている話題に当然のごとく返事した。「知ってますとも、いったい、誰のいたずらかしら？」運転手は、さっそく、聞き込みを開始することにした。

「カラスを除去すると100万ドルの報奨金が出るそうなんですが、鳥類学者でも、警察でも、軍隊でも、除去できないそうです。思うんですが、大人では、カラスを除去できないと思うんです」アンナは、大人では、と言ったことに疑問を感じた。「大人では、できないと言うことは、子供だったら、できると言うことですか？」運転手は、もう少し具体的に話すことにした。

「あくまでも、推測ですが、カラスを呼び寄せることができる機械を発明した天才が、ホワイトハウスにカラスを集めていると思うんです。きっと、これは、テロじゃなくて、いたずらだと思うんですよ。有名な鳥類学者が除去できないと言うことは、このような機械は、発明した天才しか持っていないということです。と言うことは、カラスを除去できるのは、この機会を発明した天才だけと言うことになります」

アンナの頭は、キリキリ痛み始めた。単細胞のアンナの頭は、回りくどい話に拒絶反応を示すのだった。「もっと、簡単に話してくれませんか？」運転手は、単刀直入に分かりやすく話すことにした。「回りくどい話をしてすみません。つまり、カラスを除去できる大人は世界中にたった一人、その人は、カラスを呼び寄せることができる機械を発明した天才です」

アンナは、運転手の言いたいことを察した。つまり、その天才を探し出して、いたずらをやめさせればいいのだと。「つまり、その天才を探せばいい、ということですね」運転手は、その天才を探し出せたとしても、いたずらをやめないような気がしていた。「確かに、おっしゃるとおりですが、その天才は、いたずらをやめないでしょう。そこで、カラスを追い払うには、カラスにお願いする以外ないということです」

アンナは、中卒でかなり頭が悪いと思っていたが、この運転手は、自分よりもっとバカじゃないかと思った。自分よりバカがいたと思い、からかってやった。「カラスにお願いするっておっしゃいますが、いったい誰がお願いするんですか？カラス語が話せる人間がいるんですか？」運転手は、待ってましたとばかり、即座に返事した。「そこなんです。お客さんは、聞いたことはありませんか？動物と話ができる人がいるって」

ネコと話している亜紀の姿が、アンナの頭にポツと浮かび上がった。「まあ、いるにはいるでしょう。ウチの子もネコと話しますから」運転手は、赤信号に気づき、急ブレーキをかけた。車が止まると即座に話を続けた。「そうでしょ。動物と話ができる子供がいるんですよ。お宅のお子さんは、カラスは、好きですか？」アンナは、カラスと聞いて、忌々しい白いカラスを思い出した。

「私は、カラスが大嫌いです。公園にいるカラスが、私を見つめて、アホ～アホ～、って鳴くんですよ。いつか、撃ち落してやろうと思っているんです。でも、亜紀は、カラスが好きみたいです。どこが、かわいいのか？」運転手は、信号機が青になると、ゆっくりアクセルを踏み込んだ。「え、カラスが好きなんですか？お宅のお子さん、カラスとお話とかされますか？」忌々しい白いカラスの話題はしたくなかったが、カラスと楽しそうに話す亜紀のことを話すことにした。

「他人には言わないでくださいよ。亜紀は、カラスと楽しそうに話をするんです。とにかく、気味が悪くって、今日も、そのことで、先生に相談したところなんです」運転手は、犬も歩けば棒にあたる、とはこのことだと思った。「お客さん、ぜひ、亜紀ちゃんに会わせていただけませんか。お願いします」アンナは、そのついでにサインをもらうことにした。「それは、かまいませんけど。お願いなんですが、サインをいただけますか？」

運転手は、大喜びで返事した。「私のようなものでよかったら、何枚でも」アンナは、甘党茶屋でぜんざいをご馳走することにした。「ちょっと、公園の茶店で休憩なさってください。亜紀は、2時半ごろ帰ってきますから、それまで、ごゆっくりなさってください」タクシーは、産の宮交差点を左折し、3分ほど南に走って井田の交差点を右折した。右手に見える前原東中学校を通過したタクシーは、すぐに左折した。

アンナは、自宅前に到着すると声をかけた。「ここでいいです。あそこの駐車場に入ってください」運転手は、甘党茶屋駐車場と表示された、お店の向かい側にある駐車場に車を入れた。アンナは、運転手を甘党茶屋に案内し、即座に着替えをして、ぜんざいの準備に取り掛かった。運転手は、カラスと話ができるという亜紀ちゃんに会えると思うと、ワクワクして、落ち着かなかった。

テーブルでキョロキョロしている運転手に、営業用の笑顔を作ったアンナは、ぜんざいを彼女の前にそっといた。「どうぞ、寒い日は、ぜんざいですよ。とっても体があつたまります」運転手は、甘いものに目がなく、手当たりしだい食べる癖があり、太り始めた体が気になり、ダイエット中だった。しかし、せっかく作ってくれたぜんざいを断るわけに行かず、笑顔で食べることにした。「あ～～、いい香り。ぜんざい、大好きなんです。いただきま～す」

笑顔で食べてくれた運転手を見てほっとしたアンナは、早速サインをお願いすることにした。奥の厨房に準備していた色紙を取りにかけて行くと、すぐにかえ戻ってきた。「運転手さん、サインお願いしてもよろしいですか。食べてからでいいですから」運転手は、うなずき、おいしそうにぜんざいをすすり、モグモグと口を動かし白玉団子を食べた。食べ終えた運転手は、色紙を手に取り、口森ひろ子、と草書でスラスラと書いた。



色紙を受け取ったアンナは、まじまじと見つめ、大きくうなずき笑顔を作って、ありがとう、と言って頭を下げた。「ひろ子さん、得意な歌にどんなのがあるんですか？」カラオケ女王は、小さな笑顔を作り、答えた。「坂本冬美さんの夜桜お七、テレサ・テンさんの別れの予感、演歌は、何でも歌います。でも、演歌以外も歌えるんですよ。松任谷由美さんの歌とかも」

アンナは、演歌以外も歌えると聞いて、ぜひ、今、この場で聞きたくなった。「松任谷由美さんの歌も歌えるんですか。できれば、今ここで、松任谷由美さんの歌を何か歌っていただけませんか。お願いします」カラオケ女王は、ちょっと首をかしげ、パッと目を輝かせて、返事した。「それでは、恋人がサンタクロース、アカペラに挑戦してみます」カラオケ女王は、席を立つと、フロアの中央に立って、お辞儀をした。

昔となりのおしゃれなおねえさんは クリスマスの日 私に云った 今夜 8時になれば サンタが家にやって来る ちがうよ それは絵本だけのおはなし そういうわたしに ウィンクして どもね 大人になれば あなたもわかる そのうちに 恋人がサンタクロース 本当はサンタクロース つむじ風～～、

突然、アンナの大きな声が響いた。「ア～、いけない、迎えに行かなくっちゃ。ひろ子さん、亜紀を駅に迎えに行ってください。ちょっと、待っていてください」アンナは、彼女の茶碗にほうじ茶を注ぎ、あわてて飛び出していった。南側のガレージから、勢いよくシルバーのベンツが飛び出していった。このとき、亜紀ちゃんが地下鉄で学校に通っていることに気づいた。10分もするとベンツは戻ってきた。

亜紀は、自分の部屋で着替えを済ませて、店内で首を長くして待っていたひろ子のところにやってきた。亜紀は、礼儀正しく、お辞儀をして挨拶した。「こんにちは。亜紀です」アンナは、亜紀をひろ子の正面に腰掛けさせた。ひろ子も丁寧に挨拶した。「はじめまして、口森ひろ子です。こちらこそよろしく」アンナは、早速、ひろ子がカラオケ女王であることを教えた。「亜紀、ほら、この前、テレビで見たカラオケ女王さん。憶えているでしょ。サインもらっちゃった」

亜紀は、タクシーの運転手がカラスについて聞きたいことがあると車の中で聞かされ、いったいどんなことかと不安な気持ちになっていた。「憶えています、福岡県大会で優勝された方ですね。本当にお上手ですね」亜紀は、カラオケ女王がカラスとどんな関係があるのだろうと首をかしげた。ひろ子は、早速、カラスの話をすることにした。「ぶしつけでごめんね。一刻を争うことだから、許してね。亜紀ちゃんは、カラスが好きで、よく、カラスとお話しするんだってね。カラスの気持が分かるの？」

突然の質問に目を丸くした亜紀だったが、動物との会話について平然とした顔で説明した。「亜紀は、動物とお話するのが好きなの。猫、犬、カラス、ハト、すずめ、ウサギ、ヘビ、いろんな動物とお話するの。白いカラスは、親友なのよ」ひろ子は、もしかすると、特殊な能力を持っている子じゃないかと直感した。「カラスとお話できるってことは分かったわ。亜紀ちゃんも、知ってるよね。カラステロのこと」

亜紀は、ハイと元気よく返事した。「でも、ちょっとちがうよ。あれは、カラステロじゃなくて、サンタのプレゼント。白いカラスがそう言っていたの」ひろ子は、ちょっと頭が混乱した。カラスを追い払えるかどうか尋ねようかと思っていた矢先に、カラスは、サンタのプレゼントといわれては、何と言って、話を進めればいいのか分からなくなった。でも、アメリカは、カラスの大群に困っているわけだから、ここで引き下がるわけには行かなかった。

「あのカラスは、サンタのプレゼント？でも、アメリカは、とっても困っているみたいよ。どうして、カラスの大群が、サンタのプレゼントなの？」亜紀は、一度首をかしげて、返事した。「よくわかんない。でも、白いカラスさんが言うには、サンタのプレゼントだって。大統領が、世界中の子供たちにプレゼントをあげたら、カラスは、みんなが喜ぶプレゼントに変わるんだってよ」

ひろ子は、眉間にしわを寄せ、しばらく黙り込んだ。亜紀ちゃんは、ちょっと頭がおかしいのではないかと思った。確かにカラスと話ができるかもしれないが、サンタのプレゼントというのは、妄想から生まれたお話ではないかと思った。ひろ子は、信じていいものか迷った。ここで疑って、亜紀ちゃんを怒らせてしまったら、これ以上何もしゃべらなくなるような不安がよぎった。

「白いカラスさん、ってアメリカにいるカラスさんとお友達なの？」亜紀は、目じりを下げて、小さな声で話した。「よくわかんない、白いカラスさんが、そう言ってただけだから。白いカラスは、風来坊といってね、江戸からやってきたんだって」ひろ子は、頭はいいかもしれないが、妄想癖のある子だと思った。亜紀を傷つけてはいけないと思い、もう少し話をすることにした。

「それじゃ、もしもよ、大統領が、世界中の子供たちにプレゼントをするって言ったら、本当に、カラスはみんなが喜ぶプレゼントになるの？」亜紀は、即座に答えた。「当然よ。風来坊は、いつも胸を張って、えらそうにしているけど、嘘は言わないわ。亜紀は、信じてるもん」ひろ子は、もう少し妄想に付き合うことにした。ここまで、カラスの言っていることを信じているなら、実行してみることにした。

「亜紀ちゃん、風来坊さんを連れて、アメリカに行ってみようか。風来坊さんに、大統領の言葉をホワイトハウスのカラスさんたちに伝えてもらいましょうよ。それは、できるよね」亜紀は、しばらく考えて、返事した。「風来坊に聞いてみないと、わかんない」ひろ子もムキになってきた。「それじゃ、風来坊さんに聞いてみてよ。お願い」亜紀は、北向きの窓から公園を覗いた。「それじゃ、ちょっと、待ってて、公園に行ってみる」

亜紀は、お店のドアを勢いよく押し開け、かけて行った。10分ほどすると、亜紀は、息を切らせて戻ってきた。「お待たせ、お姉さん、オーケー。風来坊がついてきてくれるんだって。本当に、大統領が世界中の子供たちにプレゼントをすれば、カラスはみんなが喜ぶプレゼントに変身するんだってよ。アメリカにレッツゴー」ひろ子は、とんでもない展開になってしまったと思った。亜紀ちゃんは、アメリカ旅行をしたくて、こんな作り話をしているのではないか、とふとひろ子は思った。

ひろ子は、自分の浅はかさを反省した。亜紀の夢を壊さないようにひとまず退散することにした。「分かったわ。とにかく、大統領にこの話をしてみるわね。もし、大統領から、オーケーがもらえたら、アメリカに行きましょう」まさかこんな展開になるとは予想していなかったひろ子は、沢富刑事に相談することにした。早速、ひろ子は、沢富刑事に電話した。

## おバカな刑事

ひろ子は、土曜の午後7時に、伊達刑事のマンションで亜紀の話をする事になった。伊達刑事の左横にナオ子、沢富刑事の右横にひろ子が、テーブルを囲んでいた。三人は、ひろ子の話が始まるのをじっと固唾を呑んで待っていた。ひろ子は、大きく深呼吸して、口火を切った。「先日、亜紀ちゃんに会ってきました。亜紀ちゃんは、確かにカラスとお話ができるようです。でも、ちょっと、話が妄想的で、上手に話せないかもしれませんが、とにかく、亜紀ちゃんの言ったこととお話します」

三人は、小さくうなずいた。「亜紀ちゃんには、白いカラスのお友達があります。その白いカラスは、風来坊と言うそうです。亜紀ちゃんは、風来坊とお話しをして、ホワイトハウスのカラスのことを知ったと思われます。風来坊が、亜紀ちゃんに言った内容は、ホワイトハウスのカラスは、サンタのプレゼントだそうです。そして、それらのカラスは、大統領が世界中の子供たちにプレゼントをあげれば、みんなが喜ぶプレゼントに変身するそうです。つまり、大統領が、世界中の子供たちにプレゼントをあげれば、カラステロは、解決すると言うことです」

三人は、きょとんとして、まったく言葉が出なかった。三人は、黙っていたが、沢富刑事が、質問した。「亜紀ちゃんは、普通の子供ですか？妄想癖のある子供じゃありませんか？」ひろ子は、何と言って返事していいか、困惑したが、素直な気持ちを述べた。「私も、最初は、子供の妄想だと思いました。でも、話をするにしたがって、亜紀ちゃんを疑えなくなっていました。亜紀ちゃんは、白いカラスを信じているみたいです。だから、純粋な目で、私を見つめるのです。そんな眼を見ていると、作り話はやめなさい、とはいえなくなりました」

三人は、目じりを下げて小さくうなずいた。しばらく沈黙が続き、伊達刑事は、少し冷めたお茶をすすった。伊達刑事は、静かに話し始めた。「ウム～～、何と云っていいか、妄想と言えどそれで片付くんだが、どうも後味が悪い。馬鹿なことをするようだが、この話を警察庁長官に話してみてもどうだろうか？」沢富刑事は、顔を引きつらせてしまった。「先輩、それは、ちょっと、刑事たるものが、子供の妄想を信じたとなると、今後の出世にひびくと思います。やめておいたほうがいいんじゃない」

ナオ子も同感だった。「あなた、それだけはやめてください。出世どころか、刑事をクビになってしまいますよ。お願いですから、冷静になって、あなた」ひろ子もナオ子と同じだった。「今の話は、亜紀ちゃんの言ったことをそのまま、伝えたに過ぎません。子供の妄想を傷つけるのは、忍びないですが、だからといって、子供の妄想にそこまで付き合う必要はないと思います。こちらも、大統領に相談したところ、プレゼントは無理だった、と嘘を言えばいいと思います」

目をつぶり腕組みをした伊達刑事は、静かに考え込んだ。三人は、伊達刑事をじっと見つめていた。大きく目を見開いた伊達刑事は、ニコツと笑顔を作って、低い声で話し始めた。「腹を決めた。俺は、刑事を辞める」ナオ子のヒャ～～～と言う悲鳴が部屋中に響き渡った。「あなた、なにを言っているか、分かっているの？冗談は、やめてください」沢富刑事も興奮して話し始めた。

「ちょっと、冗談がきついですよ。こんな話、この辺でやめましょう。亜紀ちゃんには、ひろ子さんから、上手に話してもらえばいいじゃないですか。だいの大人が、子供の妄想に踊らされるなんて、ばかっています、そうでしょ、ひろ子さん」ひろ子は沢富刑事に大きくなずいた。「そうですとも、こんな話をした私もバカでした。子供の妄想を真に受けるなんて。妄想の話は、お仕舞いにしましょう」

伊達刑事は、目を吊り上げ、さっと立ち上がった。そして、沢富刑事の前に立つとストンと腰を落とし土下座した。「頼む、お前から、警察庁長官に話してくれ。全責任は、俺が取る。俺は、亜紀ちゃんを信じる。頼む、この通りだ」三人は、気でもふれたのかと開いた口がふさがらなかった。沢富刑事は、指を震わせながら、伊達刑事の左肩に指先を当てた。「先輩、分かりました。頭を上げてください。僕も、やるだけのことは、やってみます」

頭を上げた伊達刑事の目から、涙が零れ落ちていた。「すまん～、馬鹿な上司を持って。一生に一度のお願いだ。お前には、決して迷惑はかけん」伊達刑事は、立ち上がり、自分の席に戻った。ナオ子は、不安げな顔で沢富刑事に尋ねた。「そんなことして大丈夫なの。沢富さんのお父様にご迷惑がかかるんじゃないの？」沢富刑事は、笑顔で答えた。「僕も腹をくくりました。先輩がやめるときは、僕もやめます」



伊達刑事の顔が引きつった。「おい、お前は関係ない。全責任は、俺が取る。やめるのは、俺だけでいい。馬鹿なことは言うな」沢富刑事は、平然と言い放った。「いいじゃありませんか。子供を信じて、刑事を辞めたって。子供を信じられないようでは、刑事は失格ですよ。オヤジには、そのことは伝えます。オヤジも分かってくれるはずですよ。亜紀ちゃんを、みんなで信じましょう」ナオ子とひろ子は、見詰め合うと、小さくうなずいた。

沢富刑事は、父親である警察庁長官に亜紀ちゃんのことと刑事としての今後のことを話した。刑事をやめると聞かされた父親も腹をくくり、総理にすべてを話した。総理は、カラスを除去する交換条件として、大統領が世界中の子供たちにプレゼントをすること、と聞いて、ちょっと、ひらめいた。世界中の子供たちにプレゼントをあげる、と大統領が世界に宣言したならば、天才がいたずらをやめるのではないかと。たとえ、少女とカラスとの交渉がうまくいかなくて、カラスが除去できなかったとしても、賞賛を浴びることになるのではないかと。

総理は、早速、米務大臣に、カラスと会話できる少女が日本に一人いること、また、カラスを除去するために、世界中の子供たちにプレゼントをしてほしいことを伝えた。返事は、即座に帰ってきた。了解とのことだった。また、大統領専用機で少女を迎えに行くとのことだった。そして、カラスと話ができる少女のニュースは、瞬く間に、世界中に広まった。亜紀は、伊達刑事が付き添いアメリカに行くことになった。

## 平和のプレゼント

1 2月23日の午後5時、亜紀と風来坊と伊達刑事は、DC警察の護衛を受け、リンカーンでワシントン記念塔に到着した。そして、即座に、大統領は、世界中のメディアを使って、子供たちにプレゼントを贈る約束を発表した。そのことを確認した亜紀は、風来坊にそのことを伝えた。風来坊は、うなずくと、カラスが群がるホワイトハウスに向かって、飛んでいった。

20分ほどすると、風来坊は戻ってきた。そして、風来坊は、24日の午前零時、ホワイトハウスに群がるカラスたちは一斉に飛び立つ、と亜紀に伝えた。亜紀は、そのことを伊達刑事に伝え、伊達刑事は、通訳に伝え、通訳は、大統領補佐官に伝え、大統領補佐官は、大統領に伝えた。そして、大統領は、世界中のメディアに、そのことを伝えた。世界中の人々は、午前零時に本当にカラスが飛び立つのか確かめようと、じっとテレビ、PC、携帯電話を見つめていた。

亜紀は、カラスと会話ができる少女と言うことで、一躍、時の人となった。午前零時まで、まだ時間があるため、亜紀と風来坊と伊達刑事は、SNT24テレビ局で待機することになった。二人と白いカラスは、世界中のテレビに映し出された。そこには、世界的に有名な鳥類学者、ジョンが招待されていた。ニュースキャスターのマイケルは、亜紀に質問した。「ホワイトハウスのカラスたちは、大統領にどんな要望をしたのですか？」

亜紀は、少し緊張していたが、小さな笑顔を作って、風来坊から聞いたことを話した。「風来坊から聞いたんですが、カラスたちは、サンタのプレゼントだそうです。世界中の子供たちに“平和のプレゼント”をしてくれるならば、カラスたちは、みんなが喜ぶプレゼントになって、飛び立つそうです。世界中の子供たちとは、先進国の豊かな子供たちはもちろん、シリア、アフガニスタン、スーダン、イスラエル、北朝鮮、中国、インド、ネパール、日本などの孤児や貧しい子供たちです。それと、戦争から逃れている難民の子供たちです」

世界中の人々は、亜紀のコメントに愕然とした。彼らは、プレゼントをおもちゃとかお菓子だと思っていた。ところが、サンタが要望したのは、物ではなく、愛だった。マイケルは、ジョンの意見を聞いた。「ジョンさん、サンタの要望は、聞き入れられるでしょうか？サンタが要望してきたプレゼントを大統領はお金だと勘違いしていると思われませんが、この点はいかがでしょう」

ジョンは、右手の中指でほんの少しメガネを押し上げ、答えた。「大統領は、分かっています。おもちゃやお菓子をプレゼントすると同時に、子供たちが元気に暮らせるように、無駄な武器を拾い集めてくれることでしょうか」疑いの眼差しをしたマイケルは、時間を気にしながら、視聴者の気持ちを代弁するように、質問した。「もう少しで、零時です。亜紀ちゃん、サンタは、約束をまもってくれるでしょうか？」

亜紀は、イラッとした顔で返事した。「サンタさんが、約束を破ることは、決してありません」少し怒ったような顔をした亜紀に伊達刑事は、顔をキョロキョロさせた。すかさず、マイケルは、大人の意見を言わせようと、伊達刑事に質問した。「刑事さんも、サンタは、約束を守ると思われますか？」伊達刑事は、何と答えて言いか困惑した。まさか、だいの大人がサンタを信じているとは言えず、かといって、信じていないともいえず、顔が真っ赤になった。

腹をくくっていた伊達刑事は、破れかぶれで、怒鳴るような大きな声で、返事した。「はい、亜紀ちゃんが言うんだから、間違いありません」亜紀は、笑顔を作り、左横の伊達刑事を見上げた。スタジオ内が、ド〜とどよめいた。テレビを見ている世界中の人たちも、感嘆の声を上げた。世界中の人々は、刑事を馬鹿にするどころか、尊敬の眼差しで見つめた。もはや、伊達刑事は、世界的ヒーローになってしまった。

午前零時は、すぐそこに迫ってきた。マイケルは、カウントを始めた。9・8・7・6・5・4・3・2・1 テレビの画面にホワイトハウスがクローズアップされた。10,000羽以上の黒いカラスたちは、いっせいに羽ばたき始めた。そのときだった、黒いはずのカラスは、赤、オレンジ、黄色、緑、水色、青、紫、の光輝く色のカラスとなり、夜空に舞い上がった。そのとき、光り輝く真っ白い小雪が夜空にきらめき、サンタの歌声が世界中に響き渡った。

真っ赤なお鼻の トナカイさんは いつもみんなの わらいもの

でもその年の クリスマスの日 サンタのおじさんは いいました

暗い夜道は ぴかぴかの お前の鼻が 役に立つのさ

いつも泣いてた トナカイさんは 今宵こそはと よろこびました

世界中に散らばるテロの傭兵たちは、奇跡に驚き、手に持っていた武器を落としてしまった。たった一人でバカを演じた伊達刑事は、亜紀ちゃんをおんぶして夜空を眺めていた。子供がいない彼は、そっと心の底でつぶやいた。亜紀ちゃんが、自分の子供だったらな～。彼は、亜紀に声をかけた。「亜紀ちゃん、ありがとう」亜紀は、あったかい背中で夢を見ていた。亜紀にとって、生まれてはじめてのおんぶだった。